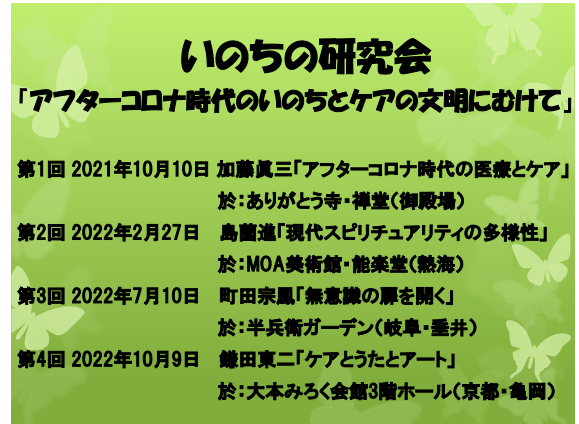




1



2

発題の構成

はじめに～発題タイトルを「ケアとうたとアート」とした理由「うた」は「ケア」であり「アート」である。

- 1, 『古事記』のうた①～スサノノミコのうた～父と姉から放擲された流浪神の歌
- 2, 『古事記』のうた②～大国主神のうた～虐め抜かれ、2度も殺害された神の歌
- 3, 『古事記』の歌③～ヤマトタケルのうた～父から見放された皇子の歌
- 4, 『古事記』は「歌物語」であり、「鎮魂の書」であり、「グリーンケア・スピリチュアルケアの書」である。
- 5, 死、愛する者の喪失感情、不当なる虚神による苦難と痛み
～まさに「うた」は、ケアであり、アートである～
- 6, 『生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける』(紀貫之『古今和歌集(仮名序)の「いのちの憂」の哲学
- 7, 第三のグリーンケア・スピリチュアルケアの「ワザラギ」としての「鎮魂」(第二のグリーンケア・スピリチュアルケアのワザラギは、琵琶法師による『平家物語』平曲) 鎮魂の要能
- 8, 三種学問論 《宗教・皇性・意識の未来》島蘭道、島田裕巳、吉福伸也、松澤正博、岡野守也、鎌田東二、春秋社、1993年)
- 9, 大本の「歌集」～スサノノの道と言霊実践

おわりに～『鎮魂絶命』を鑑えて

3

『古事記』のキーマン(鍵神)である

1, 『古事記』のうた①:スサノノミコの「うた」

～父と姉から放擲された流浪神の歌

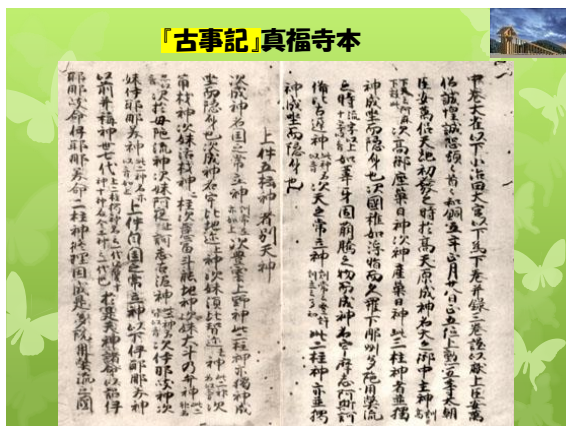
「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠めに 八重垣作る その八重垣を」

- この歌が、日本の和歌(短歌形式)の濫觴(始まり)とされる。
- ここにおいて、「うた」とは「心直しのワザラギ」(霊的転換法)です。

このスサノノの「八雲立つ」の祝婚歌の根幹には、
「母の死」という「悲」があります。

「結婚」の喜びの前に、「死」による喪失と悲しみがあるのです。

4



5

グリーンケア/スピリチュアルケア 「鎮魂」の書としての『古事記』

- ①イザナミの悲嘆と鎮魂～いのちの産出と死と「辱」
- ②スサノノの悲嘆と鎮魂～母の喪失と母への思慕
- ③オホナムチ(大国主)の悲嘆と鎮魂～兄神たちからのいじめと国譲り
- ④コノハナサクヤビメの悲嘆と鎮魂～「辱」と火中産出
- ⑤トヨタマビメの悲嘆と鎮魂～「辱」と歌
- ⑥敗残の国つ神々ないし異族(クマソタケル、イズモタケル等)の悲嘆と鎮魂
- ⑦ヤマトタケルの悲嘆と鎮魂～父との対立
- ⑧オトタチバナヒメの悲嘆と鎮魂～自己犠牲
- ⑨アカイコの悲嘆と鎮魂～待つこととと祭ること

6

物語の諸機能・はたらき

- 物語ということの中に鎮魂機能がある。
- 物語は、慰撫する。昇華(カタルシス)する。
- 物語は、顕彰・美化する。(讃える)
- 物語は、隠蔽する。変容させる。

7

『古事記』における創世神話

- 1、宇宙起源神話→高天原神話～「むすひ」
- 2、人類起源神話→国生み・神生み神話
- 3、文化起源神話→歌と祭りの発生
 - ①天岩戸隠れと祭りの始まり
 - ②八俣大蛇退治と歌の始まり

8

「スピリチュアルケア」、ないし、「グリーンケア」 としての古典の理解と解釈

- 1、物語と宗教思想～「スピリチュアルケア」と「グリーン(悲嘆)ケア」における「物語る」ことの重要性
- 2、「鎮魂」の物語文芸＝スピリチュアルケアとしての『古事記』『平家物語』と能
 - ①『古事記』は「出雲鎮魂」(国作り→国譲り)物語を第一主題としている。その祖がスサノヲノミコと大国主神(出雲大社・杵築大社の主祭神)敗者を雄々しく立派に美しく語る→それにより勝者の荘厳化と権威化増大
 - ②『平家物語』は「平氏鎮魂」(とりわけ壇ノ浦の合戦による平家滅亡)の物語文芸
 - ③能の原素材は『平家物語』が一番多い。特に修羅物

9

『古事記』上巻のストーリー＝四つのステージの展開

- ①起＝国生み神話～伊邪那岐神と伊邪那美神のみのとまぐはひによるが、最後に火の神カグツチを産んで伊邪那美神は黄泉国に「神避(かむさ)る」。そして、高天原と世界の最大の危機が、須佐之男命の乱暴狼藉による天照大御神の天岩戸隠れで、それを打開する生存戦略が祭りの開催であった。
- ②承＝国作り神話～天上世界である高天原の物語ではなく、地上の国の物語である。そこでは、大国主神と少名毘古那神が主人公となって、この世界を豊かな国土に作り上げる。

10

- ③転＝国譲り神話～大転換:だが、その作り上げた大切な国土を大国主神は、天照大御神の子孫の天孫ニギノミコに譲ってしまう。その際、その「国」の主宰神である大国主神は自ら決断せずに、わが子の事代主神と建御名方神の二神に意志決定させるという不可思議な行動を取る。

～物語の鎮魂機能

- ④結＝国治め神話～結束として、国治め神話が語られるのだが、これまた一筋縄ではいかず、天孫ニギノミコの子孫の天孫降臨、ホデリノミコ(海幸彦)とホヲリノミコ(山幸彦)のサチの交換と対立、ウガヤフキアヘズノミコ、そして、『古事記』中巻の「かむやまといはれひこのみこと」(初代神武天皇)と日向三代が続き、四代目のカムヤマトイハレヒコノミコになって初めて「神世＝神代」から「人世＝人代」となり、初代天皇神武の誕生となる。中巻は神武天皇から第15代応神天皇、下巻は第16代仁徳天皇から第33代推古天皇まで。

11

いのちの讃歌としての『古事記』

- 『古事記』はいのちの讃歌である。
- それが日本民族の叙事詩であることは間違いないが、そこにもっと大らかな宇宙的ないのちの歌声がある。
- とりわけ冒頭の神々の出現と国生みの伝えは天地をつなぐいのちの架け橋をかける生命讃歌の絶唱であり、心に沁みる。
- そのいのちの讃歌は間違いなく折れであり大きな願いであるが、しかしそれは同時に苦悩の表出でもあり、悲しみでもあり嘆きでもある。
- 火の神カグツチを産んだ母イザナミが黄泉の国、死の国に赴くところからその悲しみと苦悩が始まる。
- その母の悲と苦を全身全霊で受け止めたのが『古事記』の中でもっともやんちゃなスサノヲノミコである。
- その暴力的なスサノヲが八俣の大蛇を退治してクシナダヒメと結婚し、祝婚の歌を歌うところが『古事記』前半のクライマックスである。
- 『古事記』の物語はとてまなまましい。
- 伝承と語りの強度と圧力が厚く思い深く塗り込まれている。イザナミノミコの強力な「尊(はち)」も怨念も、それを晴らすスサノヲの晴れやかさや清々しさも、涙も祭りも神懸りも歌も芸能も戦いも、すべてが隠れ込まれている。
- その『古事記』のいのちのうたが出雲神話に鳴り響いている。

12

『古事記』の生存哲学

- 1、「むすひ」(産巢日、むすび)一生成力
高御産巢日神(たかみむすひのかみ)
神産巢日神(かみむすひのかみ)
- 2、「この漂へる国を『修理固成』」(おさめ、つくり、かため、なせ)
一創造と統治
イザナギ・イザナミノミコトへの天つ神のミッション

13

「かくり」と「いやし」

- 「幽り」としての出雲と「癒し」としての出雲
- 死ぬることと生きること(死を光源として甦るいのち)
- オホナムズの死と再生
- 殺害する神スサノヲと殺害され甦る神オホナムズ
- 黄泉国と根国と幽世と出雲大社
- 「古伝新嘗祭」
- 出雲国造神賀詞～大和朝廷への服属儀礼
- 「鎮魂」のワザ＝スピリチュアルケアとしての『古事記』
- いのちの国であり、ヌシの国・出雲

14

『古事記』を読み解く鍵は、 「出雲神話」の理解と解読にある。

- 1)出雲は日本の「命綱」。その証拠としての「命主社」。
- 2)出雲神格はみな「いのち」に関わる神々である。
- 3)出雲的癒しのワザとは、「歌」と「琴」と「治療」である。

15

「命主社」

- 『延喜式』巻第十 神名下 出雲郡五十八座(大一座、小五十七座)
- 大穴持神社。
- 杵築大社(名神大。)同社坐大神天后神社、同社坐伊能知比売神社、同社神魂御子神社、同社神魂伊能知奴志神社、同社神大穴持御子神社…
- 神魂伊能知奴志神社(かみむすひいのちぬしのかみのやしろ)
島根県出雲市大社町杵築東182
- 出雲大社境外摂社。祭神:神皇産靈神。通称「命主社」。
- 大国主神が八十兄神たちから焼石で焼き殺された時、蛭貝比売命と蛤貝比売神を遣わして大国主神の命を助けたカミムスヒの神を祀る。

16



命主社と蛇縄

17

出雲系の神々

- 出雲神格の祖とも言えるカミムスヒは、いのちを育み助ける神。
- イザナミはいのちを生み出しもするが、破壊もする神。
- スサノヲは母を慕い暴虐の限りを尽くす破壊神であるが、同時に最大の怪物ヤマタノヲロチを退治しいのちを救う救済神でもある。
- 大国主神は因幡の白兔を助ける癒しの神であるが、二度も兄神立ちに殺され、二度も甦る復活神であり、大国主神となってスクナビコナと「国作り」をし、ついには「国譲り」をする神。
- 大国主神の子神の事代主神は、「国譲り」に賛同するが、弟神の建御名方神は反抗するも「力競べ」に敗れて逃走し、諏訪まで逃げ延び、その地に留まる抵抗神。⇒諏訪大社

18

出雲神話と「健康」と「癒し」のワザ

- 「健康＝すこやかでやすらか」であることの根源は、「むすひ」の神のはたらきに発し、「修理個成」の道を実現していくことにある。
- その「修理個成」を具現したのが、ササノヲミコトによる
「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」
という短歌の詠歌と、その子孫の大国主神による癒しのワザである。
- 大国ヌシ(主)神は、『古事記』では一番多い異名を持つ神。
- 元々の名は「大穴牟遲神」で、その神名は「大きな穴を持つ威力ある神」という意味。
- その他にも、「葦原色許男神・八千矛神・宇都志国玉神」の名を持つ。
⇒ 出雲の象徴構造

19



20

『古事記』のうた② 大国主神

- 「ササノヲのカ」は、系譜としては、筋筋として大国主神に伝わり、草薙の剣を通して霊的・文化的にヤマトタケルに伝わり、もう一つは雄略天皇に伝わっている。
- 「八雲立つ」の歌は、ササノヲの浄化された心と世界を表現している。その意味するところは、「たくさんの雲が立ち上ってくるこの出雲の地で、私は大変美しい姫を得た。その喜びの中で、八重垣をもって姫を大切に籠らせる愛の住まいを打ち建て、とことわに、ここで愛するおまえとともに過ごしていこう」というものである。
- ササノヲはその思いを歌にし、心の高ぶりを鎮めた。これをもってわが国は、歌ぶりの栄える「詩の国・歌の国」となった。
- 幼い頃より、母をしのび、母を恋い慕い、海山を枯れこすまでに泣き叫び高天原で乱暴狼藉の限りを尽くして様々なる災いをもたらした悪逆非道の神が、災いをなす恐ろしい怪物を追治して新しい世界を切り開き、愛の言葉を奏で、世界に麗しい調べをもたらし、神々と人々を幸にするワザを伝えたのである。
- このササノヲ・スピリットが、子孫の大国主神に伝わっていく。『日本書紀』本文では大国主神は実子とされ、『古事記』では六世の孫とされる。
- そのササノヲカとササノヲ・スピリットを受け継いだ大国主神がどのような歌ぶりを発揮するか。それが、「神語(かみがたり)」と呼ばれる「恋歌」であった。

21

『古事記』のうた② 大国主神の恋歌

- ぬべたまの 黒き御衣を まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたたきも これは適はず 刃つ波 そに脱ぎ棄て そに鳥の 青き御衣を まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたたきも 此も適はず 刃つ波 そに脱ぎ棄て 山果に 蒔きし あたねつき 染木が汁に 染め衣を まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたたきも 此し宜し いとこやの 妹の命 群鳥の 我が群れ住なば 引け鳥の 我が引け住なば 泣かじとは 汝は言ふとも 山処の 一本薄 頃頼し 汝が泣かさくま 朝雨の 霧に立たむぞ 若草の 妻の命の 事の語り言も是をば
- (カラスオウギ色の黒御衣服を十分に身につけて、水鳥のように胸を見る時、羽鼓きも似合わない、波うち寄せるそに脱ぎ棄て、翡翠色の青い御衣服を十分に身につけて水鳥のように胸を見る時、羽鼓きもこれも似合わない、波うち寄せるそに脱ぎ棄て、山畑に蒔いた茜草を暮いて、染料の木の汁で染めた衣服を十分に身につけて、水鳥のように胸を見る時、羽鼓きもこれはよるしい、睡しのが妻よ、鳥の群のようにわたしが群れて行ったら、引いて行く鳥のようにわたしが引いて行ったら、泣かないとあなたは云つても、山地に立つ一本薄のように、うなだれてあなたはお泣きになって、朝の雨の霧に立つようだろう。若草のようなわが妻よ。事の語り伝えは、かようでございます。(武田祐吉訳『古事記』角川文庫)

22

- 大国主神は、正妻の須勢理毘売(ササノヲの娘)がいるが、高志の国(越後の国)の沼河比売に求婚に向かい、こう歌ったと『古事記』は記す。
- 八千矛の 神の命(みこと)は 八鳥国 妻杖きかねて 遠遠し 高志国(しのくに)に 賢し女を ありと聞かして 麗し女を ありと聞かして さ婚ひに あり立たし 婚ひに あり違わせ 太刀が緒も いまだ解かすて 髪(おすひ)をも いまだ解かねば 乙女の 穠すや板戸を 押そらふら わが立たせれば 引こづらひ わが立たせれば 青山に 鶴は鳴きぬ さ野つ鳥 雉(きざし)はとよむ 庭つ鳥 鶯(かけ)は鳴く 心痛くも 鳴くる鳥か この鳥も 打ち止めせぬ いしたふや 天馳使(あまはせつかひ) 事の語言(かたりごと)も 是をば
- (ヤチホコの神様は、方々の国で妻を求めかねて、遠い遠い越の国に、賢い女がいると聞き、美しい女がいると聞いて、結婚におまじしになり、結婚にお違ひになり、太刀の緒もまだ解かず、羽織をもまだ脱がずに、娘さんの眠つておられる板戸を押しゆき立つていると、引き試みて立っていると、青い山では又エが鳴いている。野の鳥の雉は叫んでいる。庭先で二ワトリも鳴いている。腹が立つさまに鳴く鳥だ、こんな鳥はやつつけてしまえ。下におります走り便をする者の事の語り伝えはかようでございます。(武田祐吉訳『古事記』角川文庫)
- 私はあなたを求めてたいへん苦労してこまでやってきて、今、あなたの家の前に立っている。早く私を家に入れてほしい。そしてあなたと会って愛を交わし合いたい。つまりは、プロポーズの歌、求愛の歌である。だが、この歌は、自分の心のはやるさまを直接的表現していて、少し風雅と余裕に欠ける。この求愛の歌に、沼河比売はこう二つの歌を返す。

23

- 八千矛の 神の命 ぬえ草の 女にいあれば 我が心 浦渚の鳥ぞ 今こそは 我鳥にあらめ 後は 汝鳥にあらむを 命は な殺せたまひ しいたふや 天馳使 事の語り言も是をば
- (ヤチホコの神様、妻れた草のような女のことですから、わたしの心は漂う水鳥、今こそわたしの鳥でも、後にはあなたの鳥になりましょう。命長くお生き遊ばしませ。下におります走り便をする者の事の語り伝えはかようでございます。(武田祐吉訳『古事記』角川文庫)
- 青い山に 日が曙れば ぬべたまの 夜は出でなむ 朝日の 笑み笑え来て 梓桐の 白き腕 沫雪の 若やる胸を そだたき たたき まながり 真玉手 玉手さし枕き 百長に 寝は腰なさを あやにな恋ひ聞こし 八千矛の 神の命 事の語り言も是をば
- 青い山に日が曙れたら、真暗な夜に夜更しよ。朝のお日様のようにこやかに来て、コウゾの綱のような白い腕、泡雪のような若々しい胸を、そつと叩いて手をとりかわし、玉のような手をまますな、足を伸ばしてお休みなさいましょうもの。そんなになびしい思いをなさないまな。ヤチホコの神様。事の語り伝えは、かようでございます。(武田祐吉訳『古事記』角川文庫)
- 『古事記』は、この二の歌をつづけて記載しているのだが、沼河比売は、八千矛の神の訪問に心を動かされ、あなたの「鳥」に、すなわちあなたの「女」になりましょう、そんないらいらなさいまな、と情趣豊かに余裕と懇めをもって応じている。注意したいのは、二つ歌の冒頭に、「八千矛の神の命」という言葉がある点。
- 大国主神は、もともと「大穴牟遲神(おなむぢのかみ)」という名前であるが、その名以外に、『古事記』では、「葦原色許男神(あしはらのしおのかみ)・八千矛神(やちほのかみ)・宇都志国玉神(うづしにたまのかみ)」の名前を持っている。
- これはもともと別々の神々の伝承であったものを、「天つ神」を代表する「天照大御神」という神格に対応・対置する、「国つ神」を代表する「大国主神」という神格に統合するために、「神神習合した結果であろう(拙著『神と仏の出雲』角川選書、参照)。本来別の神々の伝承が、「大国主神」という新しい国家神格の要請と確立に伴って、統合されていった。つまり、古い土地の伝承や、恋愛歌謡を巧みに取り込んで結びつけ、それらを「大国主神」という大きな神格の下に結果する。そのような編纂意図があると考えるのである。

24

『古事記』のうた③ ヤマトタケル

倭は国のまほろば たたなづく青垣
山隠れる倭し うるはし

(あの懐かしい倭という国は、国の中の国、まほろばの国、一番美しく素晴らしい国だ。青々とした幾重にも重なる、天然の青垣のように山々に囲まれた倭は、何と素晴らしいところなのだろう！)

- 父から見放された(と感じている)ヤマトタケルの「国偲び」の歌。
- ヤマトタケルは、この歌の他にも、4首の歌を歌って、「崩(かもあが)り、魂は「八尋白智鳥」になって天を翔け、西の大和からさらに西の摂津の「浜」の方へ飛んで行った、と『古事記』は記す。
- きわめて悲劇的で、哀しくも美しい物語が展開。
- ヤマトタケルは、流浪するエグザイル英雄。
- 折口信夫の言葉を使えば、「マレピト」であり、「貴種流離譚」。

25

『古事記』のうた③ ヤマトタケル

○スサノヲとヤマトタケルは、確かに似ているが、決定的な点が違う。それは、スサノヲが怪物退治に成功したのに対して、ヤマトタケルが怪物退治に最終的に失敗した点である。

○ヤマトタケルは、クマソタケルやイツモタケルや東国のエミシたちは征服したが、「白猪」を「神の正身」として現われた伊吹山の神=怪物を退治することができなかった。逆に、死に至る大きな痛手を蒙った。ヤマトタケルは、最後の最後で、国つ神という怪物に敗れた。

○その怪物退治の失敗とそれによる死が、ヤマトタケルの歌を比類ない哀しみに染め上げる。そして、ヤマトタケルの死を悼む歌が、「今に至るまでその歌は、天皇の大御葬(おほみはふりに)に歌ふなり」と、『古事記』にあるように、天皇の葬儀の核心をなしている。

①なづきの田の 稲幹(いながら)に 稲幹に 旬(は)ひ廻(もとほ)ろふ、野老蔓(ところづら)
(這い廻って悲しみに暮れている能須野(のぼの)の辺の田の稲の茎に、山芋の蔓が這い絡まって動きにくいのだ、憎らしい山芋の蔓よ)

②浅小竹原(あさぢのはら) 腰なづむ 空は行かず 足よ行くな

(丈の低い篠竹が生えている原を行くときは、竹に腰を取られて進みにくいものだ。それでも、空を飛んでいくこともできず、とぼとぼ歩いていくしかない、このもどかしさよ。)

26

③海處(うみか)に行けば 腰なづむ 大河原の 植ゑ草 海處はいさよふ
(海の中に入っていくと、今度は海の波に腰を取られて進みにくい。広々とした河原に生えている水草のように、海の中では、波間にゆらゆらよたよたただようしかないのだ)

④浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

(浜千鳥よ、もう浜からは飛んで行けないので磯伝いに飛んで追いかけて行くのか)

○これら4つの歌の最初の3つの歌に、「なづきの田」と「腰なづむ」という語が繰り返されている。

○このリフレインは、白鳥になったヤマトタケルを追いかけて行こうとして、思うに任せず、よろよろ、もたもた、とぼとぼしている様子が切なく歌われている。田んぼの中でも、篠竹の野原でも、海の中でも、どこでも、稲や篠や草が邪魔になって足腰を取られ、思うように動けず、白鳥と化したミコトを追いかけて行けない。そのもどかしい、あきらめきれない、ねばりつような嘆きの深さがせつせつと歌われる。

○だが、『日本書紀』には、この4つの「大御葬歌」の跡形もない。

27

『古事記』のうた(スサノヲ・大国主・ヤマトタケル)についての小括

1、『古事記』はたいへん面白い「歌物語」であり、歌劇であり、オペラであり、ミュージカルのよう。

2、その『古事記』に表現された宇宙観と生命観、生存哲学と生存戦略

3、その『古事記』を「グリーンフェア・スピリチュアルフェアの書」(悲嘆鎮め・鎮魂の書)と捉えたのが、『古事記ワンダーランド』(角川選書、2012年)

4、スサノヲと大国主神の対照性

①母の喪失⇔母たちによる助け(再生)

2度の追放⇔2度の甦り(再生)

②娘(クシナタヒメ)を助ける⇔娘(セセヒメ)に助けられる

③国奪い(疑惑、高天原)⇔国譲り(葦原中国)

④孤立性⇔協働性

⑤殺害する神⇔殺害される神

ハタオリメ・オホゲツヒメ・ヤマタノヲロチ



28

スサノヲ・大国主神・ヤマトタケルは、
遍歴し、旅する神々・神人である。

○スサノヲは<三種の神宝>をその聖名とともに、「大国主神」に委譲した。

①生太刀

②生弓矢

③天詔琴

○スサノヲがヤマタノヲロチの尾っぽから取り出した
草薙の剣は、

伊勢の斎宮・倭姫を通して、ヤマトタケルに伝わった。

→熱田神宮の御神体

29

4、『古事記』は「歌物語」であり、「鎮魂の書」であり、
「グリーンフェア・スピリチュアルフェアの書」である。

5、死、愛する者の喪失感情、不当なる虐待による苦難と痛み
～まさに、<うたは、フェアであり、アートである>

6、「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」
(紀貫之『古今和歌集』(仮名序)の「いのちの聲」の哲学)

7、第三のグリーンフェア・スピリチュアルフェアの「ワザラギ」としての
能の「うた」である「謡(うたい)」

(第二のグリーンフェア・スピリチュアルフェアのワザラギは、
琵琶法師による『平家物語』(平曲) 鎮魂の芸能)

30

『古今和歌集』の構成

- 仮名序
- 卷第一 春歌 上
- 卷第二 春歌 下
- 卷第三 夏歌
- 卷第四 秋歌 上
- 卷第五 秋歌 下
- 卷第六 冬歌
- 卷第七 賀歌
- 卷第八 離別歌
- 卷第九 羈旅歌
- 卷第十 物名
- 卷第十一 恋歌 一
- 卷第十二 恋歌 二
- 卷第十三 恋歌 三
- 卷第十四 恋歌 四
- 卷第十五 恋歌 五
- 卷第十六 哀傷歌
- 卷第十七 雑歌 上
- 卷第十八 雑歌 下
- 卷第十九 雑体(長歌・旋頭歌・誹諧歌)
- 卷第二十 大歌所御歌・神遊びの歌・東歌・墨滅歌
- 真名序

31

『古今和歌集』(延喜5年、905年)「仮名序」

- 「和歌(やまとた)は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。
- 世の中にある人、事・業(こと)わざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひだせるなり。
- 花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、**生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。**
- **力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをよまはらげ、猛き武士(ものゝぶ)の心をもなぐさむるは、歌なり。」**

32

- 古えより伝わる日本の歌という「心のワザ学」は、人の「心」を種子として開き、さまざまな言葉の葉や花びらとなったものです。この世に生きている人にはいろいろな出来事が起こるので、「心」に思ふさまざまなものごとを、そのつど、見るものや聞くものに託して言葉に表現していきます。たとえば、花咲く野で鳴いているウグイスや池や田んぼなど水の中に生息しているカエルの声を聞くと、生きとし生けるあらゆるいのちあるものがみな「歌」をうたうことがわかります。「歌」をうたわないものなど、どこにもないのです。

- しかもその歌とは、力を入れることなしに天地万物を動かし、目に見えない霊的存在である鬼神の心にも「あはれ」と思う感動を引き起こし、男女の間を親しませて和らげ、勇敢なる荒々しい戦士の「心」でさえもしつとりと和ませ鎮める力を持っているのです。それこそが、「歌」であり、歌の力と働きであり、古より伝わる「心のワザ学」なのです。

33

『古今和歌集』「真名序」

- 夫和歌者、託其根於心地、発其華於詞林者也。人之在世、不能無為、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言、是以逸者其声楽、怨者其吟悲、可以述憤、可以發憤、動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。和歌有六義、一曰興、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。若夫春鶯之啼花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也。然而神世七代、時賢人淳、情欲無分、和歌未作。逮于素戔嗚尊、到出雲國、始有三十一年之詠、今反歌之作也。其後雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者。
- それ 和歌は、その根を心地に託け その花を詞林に発くものなり。人の世にある、無為なること能はず、思慮遷り易く、哀樂あひ変わる。感は志に生り、詠は言に形る。ここをもちて、逸する者はその声楽しく、怨する者はその吟悲し。もちて懐を述べつべく、もちて憤を発しつべし。天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、人倫を化し、夫婦を和ぐること、和歌より宜しきはなし。和歌に六義あり。一に曰く 興、二に曰く 賦、三に曰く 比、四に曰く 興、五に曰く 雅、六に曰く 頌。かの 春の鶯の花中に啼り、秋の蟬の樹上に吟ぶがごとく、曲折なしといへども各歌謠を發す。物皆これあり、自然の理なり。然れども、神の世七代は、時賢に人淳うして、情欲分かつことなく、和歌いまだ作らず。素戔嗚尊の出雲の国に到るに速びて、始めて三十一字の詠あり。今の反歌の作なり。その後天神の孫、海童の女といえども、和歌をもちて情を通ぜずといふことなし。

34

『古今和歌集』における

○スサノヲ・ルネサンス

35

『古今和歌集』真名序と仮名序

- 「素戔嗚尊、到出雲國、始有三十一年之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者」

(素戔嗚尊の出雲の国に到るに速(およ)びて、始めて三十一字の詠あり。今の反歌の作なり。その後天神の孫、海童の女といえども、和歌をもちて情を通ぜずといふことなし)

- 「あらがねの地にしては、すさのをの命よりぞおこりける。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、すなほにして、言の心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける。

- すさのをの命は、天照大神のこのかみなり。女と住みたまはむとて、出雲の国に宮造りたまふ時に、その処に八色の雲の立つを見て、よみたまへるなり。や雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」

36

『新古今和歌集』真名序と仮名序

「真名序」:

夫和歌者、群徳之祖、百福之宗也。玄象天成、五際六情之義未著、
素鷲地静、三十一字之詠甫興。

夫れ和歌は、群徳の祖、百福の宗なり。玄象天成なり、五際六情の義未だ著れず、素鷲の地静かに、三十一字の詠甫めて興る。

「仮名序」:

「やまとうたは、昔あめつち開けはじめて、人のしわざいまだ定まらざりし時、葦原中国の言の葉として、稲田姫素鷲の里よりぞつたはりける。」

37



能の目的

世阿弥(1363-1443)
『風姿花伝』

- 能(申楽)は、「魔縁を退け、福祐を招く」ための「**天下の御祈祷**」(世阿弥『風姿花伝』)、である。
- 併せて、「天下安全」「寿福増長(延長)」「寿命長遠」「衆人愛敬」「諸人快樂」(『風姿花伝』)をもたらすワザ、である。

38

- 『平家物語』『源平盛衰記』:敦盛・生田敦盛・般・大原御幸・景清・兼平・祇王・清経・小督・実盛・俊寛・正尊・摂待・千手・忠度・経政・巴・鶴・藤戸・船弁慶・通盛・盛久・八島・熊野・頼政 25曲
『朝長』『七騎落』『木曾』『知章』『俊成忠度』『屋島』『碓波』『安宅』『大仏供養』『二人静』
- 『義経記』:烏帽子折・熊坂・鞍馬天狗・正尊・摂待・忠信・錦戸・橋弁慶・船弁慶・八島・吉野静 11曲
- 『源氏物語』:葵上・源氏供養・須磨源氏・玉葛・野宮・半節 6曲
- 『古事記』『日本書紀』:絵馬・大蛇・草薙・竜田・難波・三輪 6曲
- 『伊勢物語』:井筒・右近・雲林院・小塩・杜若・隅田川 6曲
- 『古今集』:女郎花・志賀・草紙洗・高砂・難波・松虫 6曲

39

世阿弥・複式夢幻能・諸国一見の僧(西行法師がモデル?)

- 世阿弥が確立した複式夢幻能の様式では、「諸国一見の僧」と名乗る仏教者や修験者(山伏)がワキとして出てきて、「シテの『靈』」と対話する。
- 「靈」は多く、前半部では生者として登場し、後半部では死者ないし霊ないし神として登場する。
- 成仏や安心立命をもたらす仏教や修験道と、歌舞音曲によって靈を鎮める神楽的鎮魂儀礼というシャーマニズム的神道の両面を能は取り込んでいる。
- 「怨霊鎮め」という神道的観念と、「煩惱消滅」という解脱志向の仏教的観念が複式夢幻能において、見事に融合している。
- 能・申楽は、神道と仏教・修験道との合体であり、神仏習合の修験的演劇的「ワザヲギ」であり、「天下の御祈祷」(『天下太平の御祈祷』『経』)。

40

申楽の三種起源説～世阿弥『風姿花伝』

- ①申楽の始まり:アメノウズメのミコトの神憑りに端を発する神楽から始まるとする神楽的起源
 - ②釈迦説法の場合での外道を楽しませるワザから始まる仏教的起源
 - ③世阿弥が属する秦氏の先祖の秦河勝が聖徳太子の時代に始めたとする家伝的起源
- 日本文化の中でもとりわけ日本的な芸能といえる能(申楽)は、
 - イザナミの負の感情を引き継ぎ、
 - 「死」を媒介とした天の岩戸の前の「祭り」や「神懸り」から始まる。

41

世阿弥『風姿花伝』第四神儀

- 能の起源:「申楽、の始まりといふは、天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常闇に神代なりに、八百万の神達、天の香具山に集り、大神の御心をとらんとて、神楽を奏し、細玉を始め給ふ。中にも、天の細女の尊、進み出で給ひて、榊の枝に幣を付けて、声を挙げ、火処焼き、踏み轟かし、神懸りすと、歌ひ、舞ひ、かなで給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土また明白たり。神たちの御面、白かりけり。その時の御遊び、申楽の始め」
- 天の岩戸の前での「神懸り」「御遊び」:隠れた(死んだ)天照大神の「靈」を復活させる。そのためのワザとして祭り・神懸り・神楽を行う
- 神楽を引き継いだ能(申楽)は、歌(謡)と舞と囃子を統合した芸能。
- 能は「天下(太平)の御祈祷」であり、「寿福増長」のワザ
- 中世の戦乱の世の中で形を成したスピリチュアルケア・グリーフケア

42

『平家物語』に材を採った世阿弥作・能「敦盛」

- ◆ 諸国一見の僧のワキ・熊谷次郎直実＝蓮生法師
「夢の夜なれば驚きて、夢の夜なれば驚きて、捨つるや現^{うつら}なるらん」
「これは武蔵の国の住人熊谷の次郎直実出家し、蓮生と申す法師にて候、さても敦盛を手に掛け申しこと、あまりにおん痛はしく候ほどに、かやうの身となりて候、またこれより一の谷に下り、敦盛のご菩提を弔はばやと思ひ候」
- ◆ 源平の合戦で平敦盛を討った熊谷直実が出家得度して菩提を弔う僧侶となり、再び一の谷の一騎打ち現場を訪れる。
直実と敦盛との一騎打ちが哀愍を伴う悲劇的な語りで表現
- ◆ 能「敦盛」は、『平家物語』の「敦盛の最期」を踏まえ、敦盛の死後のエピソードと成仏可能性を、「敦盛の最期の最期」として上書きする。
- ◆ そして、最後に、「因果は巡り逢ひたり、敵^{かたがき}はこれぞと討たんとするに、仇^{あだ}をば思にて、法事の念仏して弔はるれば、終には共に生まるべき、同じ蓮^{はちす}の蓮生法師、敵にはなかりけり、跡弔^{あととむ}ひて賜^{たま}ひ給へ、賜^{たま}ひ給へ」と救済の方向が示されて、誤い閉じられる。

43

○ こうして、能「敦盛」は、

- 元武士の熊谷次郎直実(1141-1207)が、
出家僧・蓮生法師としての務めを果たした、

と後日談を物語ることで、

- 戦乱の後始末としての鎮魂供養の成就を、

「天下の御祈祷」(『風姿花伝』)として表現した、

のである。



(撮影:森田裕太郎)

44

さて、ちょうど今から30年前の1992年、

- 次スライドのシンポジウムを開催しました。

これが、島菌進氏とわたしの未来を先取りする

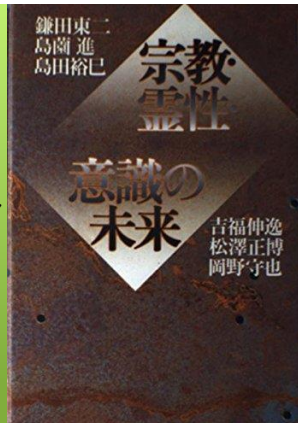
出来事だったと思っています。

45

『宗教・霊性・意識の未来』
春秋社

1992年7月に同名のシンポジウムを行ない、それを、1993年8月にまとめて、出版。

鎌田東二
島菌進
島田裕巳
吉福伸逸
松澤正博
岡野守也



新宗教ブーム、ニューエイジ・ブーム、心理学ブームの奥にひそむものは何か。現代人の心はどこに向かうのか。

特定の宗教の枠を超えた「霊性」「意識」の方向性について、人間の未来について、宗教や意識に関わる分野の論客達の議論をまとめる。

46

そのとき、はじめて、

- 「グリーンケア研究所」の課題につながる、

○ 「悲しみの共同体」

の問題について論議されたのです。

47

そして、今日の主題である、

「うた」と

「ケア」と「アート」の根幹にあるもの

が呼び覚まされたのです。

48

○ わたしの場合、

○ 今も(実は昨日の午前中も)、大阪のグリーフケア研究所の人材養成講座で担当している科目、

○ 『スピリチュアルケアと芸術』

○ につながっており、また、そのタイトルでこの3月に刊行された

○ 『グリーフケア 第10号』に掲載した文章『スピリチュアルケアと芸術』につながっているのです。

49

(研究論文)

スピリチュアルケアと芸術
——グリーフケア研究所人材養成講座での
授業を振り返りつつ——

Spiritual Care and Arts
Reflection on Lectures at the Institute of Grief Care Human Resources Training Course

上智大学大学院実践宗教学研究科特任教授
鎌田 東二
Tsu KAMATA

要旨: グリーフケア人材養成講座と資格認定課程の授業科目「宗教学」、「スピリチュアルケアと芸術」、「文献講読」を担当してきたことを踏まえて、グリーフケアやスピリチュアルケアを学ぼうとしている受講生にそれぞれの科目の意味付けをどうするか、またその内容の問題点などを考察した。特に、宗教と芸術との関係、またスピリチュアルケアと芸術の関係に焦点を当て、芸術の中の文学や詩の持つ意味や役割について検討する。具体的には、「日本三大悲嘆文学」として位置付けられる『古事記』『平家物語』『苦海浄土 わが水俣病』の中の石牟礼道子著『苦海浄土 わが水俣病』におけるアニミズム的な宗教性とキューブラー＝ロス著『死ぬ瞬間』の各章章に挙げられたタゴールの詩の意味と意義について考察した。

キーワード: スピリチュアルケア、人材養成講座、宗教学、芸術、石牟礼道子、キューブラー＝ロス

50

グリーフケア研究所の中で、

はじめに

2009年に設立されたグリーフケア研究所に私に関わることになったのは2014年からであった。その頃私は京都大学こころの未来研究センターに勤めていたが、その年から2年間、非常勤講師として、「宗教学」の科目の中で「神道の立場から1・2」の2コマを担当することになった。以来、現在に至るまで、その科目を高岡進所長の他、複数の先生方とともに担当している。

2016年からはグリーフケア研究所特任教授となり、2016年度は、「宗教学」と「死生学」を担当し、2017年度からは、「死生学」から外れて、新規科目「スピリチュアルケアと芸術」を担当するようになり、2019年度からはそれに加えて資格認定課程の「文献講読」を担当することになった。非常勤講師の時代に入ると、約8年間、グリーフケア研究所大阪の授業に関わってきた。今回、任期を終えるに当たって、この間に担当してきた科目領域の中で考えたいいくつかの問題点を今後の参考のために記しておきたい。]

■ 5 ■

51

その中で、

私がかねがね「日本三大悲嘆文学」は『古事記』『平家物語』『苦海浄土』の三書であると主張してきたが、そのような鎮魂供養を伴う「悲嘆文学」という観点から『古事記』と『平家物語』と『苦海浄土』を「三大古典」として取り上げている。『古事記』は伊弉那美命一須佐之男命一大国主神につながる出雲鎮魂を主旋律として奏で、『平家物語』は清盛の栄光の生涯と源平の合戦における滅亡する敗者として「諸行無常・盛者必衰」の姿を克明に語り出し、哀切な琵琶の音とともに平家の怨霊化を防ぐ鎮魂供養の語りとして機能する。どちらも、国家的権力闘争の中で新秩序構築という大きな転換を背景に持ち、前者は古代の権力や権威の形、後者は中世の権力と救済の形をまことにドラマティックに展開している。

この前二書が作者不明の伝承や出来事の下クメントの語り由来するのに対して、『苦海浄土 わが水俣病』（講談社、1969年1月1日刊）は、石牟礼道子という固有名による個人の著作でありながら、水俣病患者たちの聞き書きや目撃や権力との交渉過程の下クメントを通して、実に不思議な叙事詩的なポリフォニックな語りの世界を表現し得ている。それは水俣病患者の喪失や悲劇を鎮魂供養するばかりではなく、権力や文明への深

52

日本スピリチュアルケア学会で、

スピリチュアルケア研究 2017, VOL.1, 5-19

(創刊号記念論文)

スピリチュアルケアと歌物語

鎌田東二¹

要旨
「体は嘘をつかないが、心は嘘をつく。しかし、魂は嘘をつけない」。スピリチュアルケアとは、「嘘をつけない自分と他者と向き合い、対話的な関係を結び開いていく試みと過程」である。その嘘をつけない自分の魂の発露と表現としての歌あるいは歌物語を、ジョン・レノンのソリアルバム『ジョンの魂』（1970年リリース）、『古事記』（712年編纂）、『平家物語』（13世紀初期に成立）の三つの「歌物語」を分析する。そして、『ジョンの魂』においては痛みと愛の生命哲学が、『古事記』においては「むすひ」と「修羅園成」の生命哲学が、『平家物語』においては「諸行無常」と「夢」の生命哲学が表出されていることを明らかにする。とりわけ、当時の一大戦争を民族の叙事詩として詠った『平家物語』最終巻「原鹿巻」のもつスピリチュアルケア的な意味と力とはたらくについて考察する。

キーワード: 歌、物語、平家物語、スピリチュアルケア、身心実存技法

53

3. 『平家物語』に表現された「スピリチュアルペイン」と危機突破の生存戦略

前節でみたように、『古事記』は『日本書紀』のような勝利者の勝利宣言の書ではない。むしろ、敗者鎮魂の物語といったほうがよい。とりわけ、イザナミノミコトに発出する出雲鎮魂という響きを奏で、哀切を詠う。同様に、『平家物語』も敗者鎮魂の物語である。もちろんそれは、源平の合戦の末の壇ノ浦での平家滅亡という、日本古代史最後を飾り、中世史の開闢を告げる一大戦争に伴う敗者鎮魂の物語である。


54

先に述べたように、日本古代創世を告げる『古事記』の主調音は、「産巢日(むすひ・産靈)」と「修理固成(おさめ、つくり、かため、なす)」であり、敗残と破壊を組み込みながらもダイナミックな生存の産出力を称揚・讃美する。対して、日本的古代秩序の崩壊と終焉、そして「乱世」「末世」の始まりと道理を示す『平家物語』の主調音は、「無常」と「夢」の儚さと悲哀である。その中での美と栄光と滅びの非情である。

この『平家物語』の悲嘆(グリーフ)を浄化する概念は「諸行無常」であり、それは冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。」という有名な一節に端的に表現されている。それはもちろん、平清盛に代表される平家の繁栄と滅亡を詠う敗者鎮魂の物語で

55

三種の学問



- ①道としての学問——人格形成・人間性涵養を目指す。神学・教学・心学を含む。
- ②方法としての学問——知性練磨・認識機能亢進・新知見獲得を目指す。
- ③表現としての学問——学問的問いを詩や物語や演劇など諸種のワザで表現する。

56


三種の学問

○学問には、


- ①人間性の探究と涵養をめざす『道としての学問』
- ②対象と方法を明確に限定して厳密な認識と新知見の獲得をめざす『方法としての学問』
- ③問いと探究をさまざまな形式で展開する『表現としての学問』

の三種があり、

「人文学」は最も深く広くその三種の学問に関与している。



57

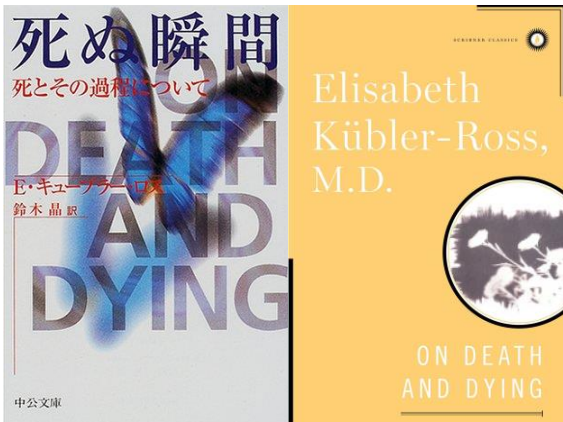


- ①道としての学問——人格形成・人間性涵養を目指す
- ②方法としての学問——知性練磨・認識機能亢進・新知見獲得を目指す
- ③表現としての学問——学問的問いを詩や物語や演劇で表現するワザを研く

- **第一の「道としての学問」**とは、孔子の『論語』に「十五にして学に志す」と述べられているように、学問をする人間の志や動機や実存的意味や倫理に基づく人格形成・人間性の深化・涵養・練磨を促す学問のあり方を示すものだ。
- **第二の「方法としての学問」**とは、科学や人文学を含めて、すべて学問には一定の方法論や領域があるが、そのような知に至る明晰な方法や領域の特定を通して、もの見方の更新や概念のイノベーションや新知識の発見と獲得を目指すあり方を示す。
- **第三の「表現としての学問」**とは、西洋で言えば、プラトンの対話編、アウグスティヌス『告白』、ニーチェの『ツウラトウストラかく語りき』など、日本で言えば、空海の『三教指帰』、中世の教学・教理問答テキストである法然の『選択本願念仏集』や百田兼俱『唯一神道妙法要集』、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』など、問いと探究を新しい表現形式の中で探り深めていくあり方を示す。
- 「学問」は、例えば「序論(問題設定)・本論(事例実験提示・論証)・結論」の過程を明確に示すような論文形式だけでなく、その思索や問題把握と問題洞察のありようそのものをさまざまな表現形式で表すことができるはずだ。今日のような「査読付き学術論文」を優先順位の第一にするような偏った一元的な評価方法では学問の豊かさや創造性を発現させることはできない。

わたし自身は、学問にはこの三種があり、その三種ともに大切で、不可欠だと考える。

58



死ぬ瞬間
死とその過程について

DEATH AND DYING

Elisabeth Kübler-Ross, M.D.

ON DEATH AND DYING

中公文庫

59

キューブラー・ロス(1926~2004)とラビンドラナート・タゴール(1861~1941)

- エリザベス・キューブラー・ロスは、**スイスのチューリッヒ**に生まれ、幼時から異文化に対する強い好奇心を持っていた。神智学の影響を強く受けていたアルベルト・シュヴァイツァー(1875~1965、1952年にノーベル平和賞受賞)に憧れ、インドの貧しい村の医師になることを志した。国際平和義勇軍への志願逆境にある人の力になりたい思い、医学校で負傷したインド人留学生を支援して、ネルー首相のレセプションに招待されている。医学校を卒業した後、インドで外科研修を計画するが、果たすことができず、1958年、結婚して米国に渡り、1965年、シカゴのプリンズゲル病院で「死とその過程」に関するセミナーを始め、それを元に1969年に『On Death and Dying』(『死ぬ瞬間』)を出す。
- 一方、ラビンドラナート・タゴールは、インドのカルカッタの裕福な家庭に生まれ、1878年にイギリスに渡り、ロンドン大学で英文学を学び、1880年に帰国。以来、東西文化の交流に関心を持ち、コスモポリタンの理想を強調するようになった。1912年にイギリスに渡った際、ケンブリッジ大学で、パートランド・ラッセルにも会っているが、その折、ワイトゲンシュタインと会っていたかもしれない。すでにベンガル語で書いた157篇の韻文詩『ギータンジャリ』を出していたが、それを英語で新たに書き上げ103篇の詩集にしたところ、W・B・イェイツの推薦で英語詩集が出て、それが1913年度のノーベル文学賞を受賞することになった。アジア初の受賞であった。詩集に、『ギータンジャリ』(ベンガル語版1910年、英語版1912年)、『迷える小鳥』(1916年)、『果実探り』(1916年)、『とらえがたきもの』(1922年)などがある。特筆すべきは、1901年、40歳で妻マリナリニ・デヴィを29歳で亡くし、41歳で次女レヌカを14歳で亡くし、43歳で敬愛していた父マハジを88歳で亡くし、1906年、45歳で末子を相次いで亡くした。その思いが『ギータンジャリ』に込められている。

60

1. 死の恐怖について

危険から守られることを祈るのではなく、
恐れることなく危険に立ち向かうような人
間になれるように。

痛みが鎮まることを祈るではなく、痛みに打
ち勝つ心を乞うような人間になれるように。
人生という戦場における盟友を求めるので
はなく、ひたすら自分の力を求めるような
人間になれるように。

恐怖におのきなながら救われることばかり
を渴望するのではなく、ただ自由を勝ち取
るための忍耐を望むような人間になれる
ように。

成功のなかにのみ、あなたの慈愛を感じる
ような卑怯者ではなく、自分が失敗したと
きに、あなたの手で握られていることを感
じるような、そんな人間になれるように。

【果実採り】（『死ぬ瞬間』鈴木晶訳、
中央公論新社）

CHAPTER I On the Fear of Death

Let me not pray to be sheltered from dangers
but to be fearless in facing them.

Let me not beg for the stilling of my pain but for
the heart to conquer it.

Let me not look for allies in life's battlefield but
to my own strength.

Let me not crave in anxious fear to be saved but
hope for the patience to win my freedom.

Grant me that I may not be a coward, feeling
your mercy in my success alone; but let me find
the grasp of your hand in my failure.

RABINDRANATH TAGORE, Fruit-Gathering
(1912, in "Savitri: The Complete Poems" (1956))

61

6. 第四段階／抑鬱

世界は、ためらう心の琴線の上で、悲哀の
音楽を奏でながら、疾走していく。

【迷える小鳥】44節（同145頁）

7. 第五段階／受容

別れの時が来た。さようなら、兄弟たちよ。
私は君たちみんなにお辞儀をして、出て行
く。

さあ、私の扉の鍵をお返しする。私は自分
の家の権利を一切放棄する。

君たちから最後の優しい言葉だけが聞きたい。
私たちは長いこと隣人同士だったが、私は
与えるよりもらう方が多かった。

いま夜が明け、部屋の暗い隅を照らしてい
た灯は消えた。

お召しがきたのだ。私は旅支度ができている。

【ギータンジャリ】93節（同191頁）

CHAPTER VI Fourth Stage: Depression

The world rushes on over the strings of the lin-
gering heart making the music of sadness.

TAGORE, from Stray Birds, XLIV (ibid. p. 97)

CHAPTER VII Fifth Stage: Acceptance

I have got my leave. Bid me farewell, my brothers!
I bow to you all and take my departure.

Here I give back the keys of my door—and I
give up all claims to my house.

I only ask for last kind words from you.

We were neighbours for long, but I received more
than I could give.

Now the day has dawned and the lamp that lit my
dark corner is out.

A summons has come and I am ready for my jour-
ney.

TAGORE, from Gitanali, XCIII (ibid. n. 123)

63

「天国はどこにあるのか？」

9. 患者の家族

父が葬式から帰ってきた。

七歳になる息子は窓辺に立っていた。目を
大きく見開き、金色のお守りを首から下
げ、その歳には難しすぎる思いで頭がいっ
ぱいだった。

父は息子を抱きあげた。息子は尋ねた。「お
母さんはどこ？」

父は空を指さして答えた。「天国だよ」
少年は空を見上げ、長いことじっと見つめ
ていた。彼は途方に暮れ、遠い夜の中へと
問を投げかけた。「天国はどこ？」

答えはなかった。星たちが、無数の闇が透
す熱い涙のように見えた。

【とらえがたきもの】第2部21節（同261頁）

CHAPTER IX The Patient's Family

The father came back from the funeral rites.

His boy of seven stood at the window, with eyes
wide open and a golden amulet hanging from
his neck, full of thoughts too difficult for his age.

His father took him in his arms and the boy
asked him, "Where is mother?"

"In heaven," answered his father, pointing to the
sky. The boy raised his eyes to the sky and broad
gazed in silence. His bewildered mind sent abroad
into the night the question, "Where is heaven?"

No answer came: and the stars seemed like the
burning tears of that ignorant darkness.

TAGORE, from The Fugitive, Part II, XXI
(ibid. p. 65)

65

キューラー＝ロスの説く5つの段階

2. 死とその過程に対する様々な姿勢

「人びと」は残酷だが、「ひと」は優しい。

【迷える小鳥】217節（同27頁）

3. 第一段階／否認と孤立

人間は自分自身に対して防柵を築く。

【迷える小鳥】79節（同67頁）

4. 第二段階／怒り

私たちは世界を読み間違え、世界が私たち
を騙しているのだと言う。

【迷える小鳥】75節（同87頁）

5. 第三段階／取り引き

木こりの斧はその柄を木に求めた。木はそ
れを与えた。

【迷える小鳥】71節（同139頁）

CHAPTER II Attitudes Toward Death and

Dying

Men are cruel, but Man is kind.

TAGORE, from Stray Birds, CCXIX (ibid. p. 25)

CHAPTER III First Stage: Denial and Iso-

lation

Man barricades against himself.

TAGORE, from Stray Birds, LXXIX (ibid. p. 51)

CHAPTER IV Second Stage: Anger

We read the world wrong and say that it de-
ceives us.

TAGORE, from Stray Birds, LXXX (ibid. p. 63)

CHAPTER V Third Stage: Bargaining

The woodcutter's axe begged for its handle
from the tree. The tree gave it.

TAGORE, from Stray Birds, LXXI (ibid. p. 93)

62

8. 希望

私は一縷の希望にすがって、部屋の隅々ま
で彼女を探し回る。

だが彼女は見つからない。

私の家は小さく、ひとたびそこから失せた

者は二度と取り戻せない。

しかし、主よ、あなたの館は無限だ。

私は彼女を探して、あなたの戸口まで来て

しました。

私はあなたの夕空の天蓋の下に立って、熱

い眼であなたの顔を仰ぎ見る。

私は永遠の縁までやってきたのだ。ここ

からは何も消えることはない。

希望も、幸福も、涙を流かしてみよう顔の幻

も、ここからは消えない。

おお、私の虚ろな生命をあの大海に没し、

深く満ちた底へと沈めてください。

そして今一度、あの失われた甘い感触を、全

一なる宇宙のなかで、味あわせてください。

【ギータンジャリ】87節（同231頁）

CHAPTER VIII Hope

In desperate hope I go and search for her in all
the corners of my room; I find her not.

My house is small and what once has gone from
it can never be regained.

But infinite is thy mansion, my lord, and seek-
ing her I have come to thy door.

I stand under the golden canopy of thine eve-
ning sky and I lift my eager eyes to thy face.

I have come to the brink of eternity with which
nothing can vanish—no hope, no happiness, no
vision of a face seen through tears.

Oh, dip my emptied life into that ocean, plunge
it into the deepest fullness. Let me for once feel
that lost sweet touch in the allness of the uni-
verse.

TAGORE, from Gitanali, LXXXVII (ibid. p. 147)

64

10. 末期患者へのインタビュー

あなたの使者である死が私の戸口にやって

きた。彼は見知らぬ海を越え、あなたの召

し状を私のもとへもってきたのだ。

夜は暗く、私の心はおびえている。でも私

はランプをもって門を明け、頭を下げて彼

を迎えよう。私の戸口に立っているのはあ

なたの使者だから。

私は合掌し、涙を浮かべて彼を拝もう。私の

心の宝を彼の足下に置いて、彼を拝もう。

彼は役目を果たしたら、私の朝に暗い影を残

して去るだろう。そして私の侘びしい家

には、よるべない私の自我だけが、あなたへの

最後の供え物として残るだろう。

【ギータンジャリ】86節（同295頁）

CHAPTER X Some Interviews with Termi-

nally Ill

Death, thy servant, is at my door. He has
crossed the unknown sea and brought thy call
to my home.

The night is dark and my heart is fearful—yet I
will take up the lamp, open my gates and bow to
him my welcome. It is thy messenger who stands
at my door. I will worship him with folded
hands, and with tears.

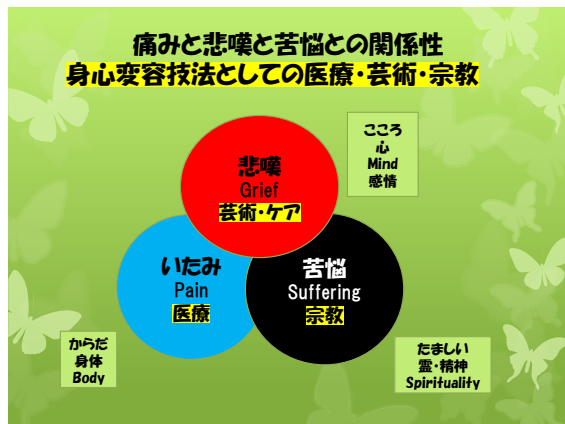
I will worship him placing at his feet the trea-
sure of my heart. He will go back with his er-
rand done, leaving a dark shadow on my morn-
ing; and in my desolate home only my forlorn
self will remain as my last offering to thee.

TAGORE, from Gitanali, LXXXVI
(ibid. p. 187)

66

11. 死とその過程に関するセミナーへの反応
 昨夜の嵐は金色の平和の冠をこの朝に贈った。
 「迷える小鳥」293節 (同 401頁)
 TAGORE, from Stray Birds, CCXCIII (ibid. p. 247)
12. 末期患者の精神療法
 死は生に属する、生誕がそうであるように。
 歩行とは、足を上げることであり同時に、足を下げることもある。
 「迷える小鳥」267節 (同 437頁)
 TAGORE, from Stray Birds, CCLXVII (ibid. p. 269)
- 器の中の水は光る。海の水は暗い。
 The water in a vessel is sparkling; the water in the sea is dark.
- 小さい真理は明瞭な言葉をもつが、大きな真理は大きな沈黙をもつ。
 The small truth has words that are clear; the great truth has great silence.
 「迷える小鳥」176節 (同 449頁)
 TAGORE, from Stray Birds, CLXXVI

67



68

神道における神の痛みの神学
 ～イザナミ・スサノヲ・大国主の悲しみと痛みと修理固成

- 内容：「古事記」に籠められたメッセージの中核に「むすひ」と「修理固成」がある。生成化育し、創造的に産出していく力と、それをうまくコントロールし、運営・維持展開していく「修理固成」のはたらきである。
- その2つのダイナミズムを出雲神話の物語とそこに流れる痛みと悲しみと鎮魂の文化と見る。
 - むすひ
 - 修理固成
 - イザナミ
 - スサノヲ
 - 大国主
 - 悲しみと痛みを感受の表出
 - それが、大本にまでつながっている！

69

9. 大本の「明光社」の設立と「歌祭」
 ～スサノヲの道と言霊実践

昭和2年(1927)1月18日、出口王仁三郎は芸術運動の結社である「明光社」を設立した。
 明光社は、冠句を作る「月光会」と短歌を作る「月明会」とを統合した芸術運動結社で、「月光」の姉妹誌として短歌誌「月明」が発刊された。
 その冒頭に王仁三郎は次のような「創刊の辞」を載せている。

○長くも神素謡鳴尊は千座の置戸を負はせ玉ひて、八雲立つ出雲の国は肥の川上に八岐大蛇を退治し賜ひ、手撫襪、足撫襪の末女奇稲田姫の危難を救ひ、翁編より姫を買ひ受け、須賀の宮居を造営し玉ひて、「八雲立つ出雲八重垣妻こめに八重垣作るその八重垣を」と三十一文字を読み玉ひしを以て和歌の巻端となす。尊の亦の御名を月詠命と尊孫し奉る。尊は高天原の妻より八百万の神々たちに神退はれ、普天率土を愛生愛民の大志を起して運歴し玉ひし神代の大英雄に坐しませり。

○爰に明光社は尊の御名に因める雑誌「月明」を発刊し、以つて敷島の大道乃ち惟神の妙地を開拓すべく生れ出でたるものなれば、大にしては愛神愛民の基礎となり、小にしては修身齊家の基本ともなる可く一大抱負を以つて將にこの声を挙ぐる事となりました。(中略)神務多端の折りをも顧みず、神業の一部として爰に月明誌を発刊し、斯道奨励のために資せんとするのであります。

70

- ここで出口王仁三郎は、和歌(短歌)が素戔嗚尊に始まることを記している。そして、この「和歌の巻端」をなす素戔嗚尊の別名が「月詠命」で、高天原を追われて、「普天率土」を「愛生愛民の大志」を持って運歴した「神代の大英雄」であると称している。そこで、「明光社」の短歌誌を、素戔嗚尊三月詠命の尊号に由来する「月明」とし、この日のもと日本、すなわち「敷島の大道」を開き、「惟神の妙地」を開拓し、「愛神愛民の基礎」とも「修身齊家の基本」ともなる「神業の一部」の実践として、この月刊誌「月明」を発刊するものであると其の志を熱く語るのである。
- その後、「月明」は第6号まで刊行した段階で、第11号まで刊行した冠句誌の「月光」と統合されることとなり、こうして新雑誌は「明光」誌と改称され、第12号から第112号まで10年近く毎月刊行された。この間、昭和3年7月2日には「明光殿」が竣工となり、そこに明光本社が置かれ、社長に出口壽賀屋(秋の家玲月)、副社長には井上荘三郎(瑞の家社月)が就任した。この頃にはすでに全国に支社50か所ができており、昭和4年(1929)2月の節分祭には、明光社の規約が制定されることになる。そして、その規約の第2条に、「本社は惟神の大道により素戔嗚尊の神意を奉戴し国風を奨励し文芸の都を開き平和の殿堂を築き万民和楽の天国を地上に建設するを以て目的」と社の目的を掲げたのである。
- こうして、「万教同根」の思想に基づきエスペラント語の普及も推進する人類愛善会の運動と、「惟神の大道」により素戔嗚尊の神意を奉戴し国風を奨励し文芸の都を開き平和の殿堂を築き万民和楽の天国を地上に建設する「国風文化の地上天国、万民和楽を実現する芸術運動を二本柱として、大本は邁進していくのである。
- 大本の芸術運動の核心には、素戔嗚尊の事績についての深い理解と念いがある。それは、何にもまして、素戔嗚尊の抱いた道の継承であり、実践である。そもそも、出口王仁三郎の霊性・権統それ自身が素戔嗚尊の霊性・権統を引き継ぐものであり、それを王仁三郎は「瑞の御魂」を稱していた。そしてその「瑞の御魂」の捨身活理の物語が「霊界物語」となっており、ドラマチックな展開を重ねたのであった。

71

現在危機：「絶体絶命」の今時
 おわりに～「絶体絶命」を超えて

- 環境危機～自然災害の多発・激甚化
- 食料・エネルギー的危機～気象異常による作物の不作・輸出入制限と飢餓の拡大
- 経済危機～コロナパンデミック、ウクライナ侵攻による不安定化
- 政治危機～ウクライナ戦争や各地の紛争と対立と分断
- 文化危機～アーティストの困窮、芸術施設の運営の困難、助成金の目減り
- 教育危機～いじめ・いそがしいこころ、自己肯定感の不足
- 家庭危機～孤独・孤立・分離・分裂・無関心・虐待・家庭内暴力
- 健康危機～コロナ禍により十分なアウトドア活動や交流ができないことによる健康不安と抑鬱
- 宗教危機～宗教(教団)ないし宗教活動に対する不信感と警戒感の醸成

参考：鎌田東二「絶体絶命」(東田四土、土曜美術社出版販売、2022年9月30日刊「サードブル」/L、2022年7月11日リリース)

72

終詩「聞耳頭巾」

おもいだして！
わすれないで！
つたえてゆけ！

いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと
いちはつたたと

もはやいづきまのものはない
なにものもつはない
あつには、ただ
ちんもこいりがあるだけ
聞耳頭巾がはいている

104

91

終詩「聴耳頭巾」

六右の話を再読した
こんな話に聞いては、いづの聴耳頭巾をまたたくまに
聞耳頭巾をまたきいて聞耳頭巾した

父さん
あなたが教えた所得増はこれほどひどい損得をもらしました
いのちのこころとどかばこの質問を

もはや、おとこちのたまたまのおたけなままたくもありません
おとこちのたまたまの、静い海に落ちていったままたくも聞耳頭巾を
おとこちのたまたまの、静い海に落ちていったままたくも聞耳頭巾を
おとこちのたまたまの、静い海に落ちていったままたくも聞耳頭巾を

(ままたくも聞耳頭巾を)

うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど

うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど
うたえ、わかもど

102

92

『絶体絶命』第1曲目「神ながらたまちはへませ」

神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても、明日の中で甦り咲く
尽十方未来際、尽十方未来際
夢を聞いて、夢よ開けと
天晴れ天晴れ、はへ、天晴れ天晴れ、はへ

104

93

須田郡司・鎌田東二 写真展

東日本大震災10年の記録と巨石文化

日 時 令和4年10月1日(土)～12日(水) 9:30-16:30 入場無料
会場 大日本郵政会館 大宮みらくろ会館3階ラウンジ 京都府民会館内91号館

●トークイベント「自然災害と世の立替え直しと芸術のちから」
日 時 10月2日(日) 13:15-15:30 (開場:12:30-) 参加無料
会場 大日本郵政会館 大宮みらくろ会館3階ラウンジ
出演 須田郡司(自然災害・京都大学名誉教授)、須田郡司(巨石文化・写真家)、山田 敬(大日本郵政総務部長)

2022年10月2日

Omoto Hosoda and Teruhiro
Omoto, Hiroki Kakan, Shin-ichi, Gunga

94

神話詩 全5部作

『常世の時軸』
『夢通分鏡』
『狂天動地』
『絶体絶命』
『開』

四作目 登々完成
詩集『絶体絶命』発売中

『常世の時軸』
『夢通分鏡』
『狂天動地』

104

95

神道ソングライター・サードアルバム『絶体絶命』全13曲

2022年7月17日リリース(奈良県吉野郡天川村坪内鎮座の天河大辨財神社例大祭日)
2001年『この星の光に魅かれて』全15曲リリース
2003年『なんもいだ一節』全14曲リリース

All Composed, Lyrics & Vocal: **Teruhiro Omoto**
Special Guest: **Bea & Vocal: Haruomi Hosoda**

Dr. am: **Shin-ichi Gunga**
Bass: **Shin-ichi Gunga**
Arrangement & Synth: **Kazuo Kawasaki**
Percussion: **Hiroaki Furukawa**
Accordion: **Shin-ichi Gunga**
Flute: **Junachi Terada**
Saxophone: **Chisel Kuroki**

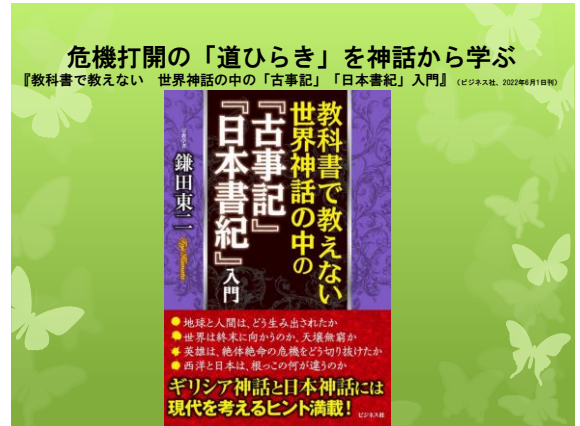
All Arrangement, Synth Programming, Voice, Guitar
Mixing & Produced **KOW**

104

96



97



98



99

100



101



102

「鎮魂再生能舞 葉山・石峰」能舞：河村博重+音霊：鎌田東二
 第一章 葉山 一復君に逢えぬなら

(法螺貝奉奏)
 序章 探すために生きてきた

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
 夢を求めて生きてきた 道を求めて生きてきた
 12345678910 果てしない 12345678910 切りがない
 12345678910 とめどない 12345678910 終わらない

探し求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた
 時を求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた
 12345678910 果てしない 12345678910 切りがない
 12345678910 とめどない 12345678910 終わらない

探し求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた
 愛を求めて生きてきた 道を求めて生きてきた
 12345678910 果てしない 12345678910 時がない
 12345678910 当てがない 12345678910 道がない
 (横笛「心月」)

遠い遠い遠い 海の果て 深い深い深い 海の底
 長い長い長い 時を駆け 荒い荒い荒い 波の中
 光は消えて 命も消えて 闇の中に 沈む
 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼
 神も仏もあるものか すべてを覆っていったなら
 神も仏もあるものか 祈りの言葉も届かない
 神も仏もあるものか も一度君に逢えぬなら
 神も仏もあるものか も一度君に逢えぬなら

遠い遠い遠い 地の果ても 深い深い深い 波の底
 長い長い長い 時を超え 光る光る光る 波の上
 光を求め 命を求め 闇を抜けて 行く
 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼
 神も仏もあるはずだ すべてのいのちの元だから
 神も仏もあるはずだ すべてのいのちの元だから
 神も仏もあるはずだ も一度君に逢えたなら
 神も仏もあるはずだ祈りの言葉が届くなら
 神も仏もあるはずだも一度君に逢えたなら (石笛)

109

第二章 永訣の朝

第三楽章 ふるさと

光りを失くしたその日から 海を見つめる日々だった
 遠い記憶の彼方から 流れ出てくる水を守り
 遙かに輝く戦火さへ 愛しきものと消え去りし
 嗚呼 夢の跡 嗚呼 夢の城 水の感涙 愛しのふるさと

ほぐがきみと出会った朝 遠くの星が泣いていた
 いつか別れの時が来ると 遠くの星が泣いていた
 いっだって どこでだって 探していたのに
 ごんな星の下 この時ばかりは 泣いたよ

ほぐがきみを想い出すたび遠くの星が泣いている
 もう二度と帰らぬ日々と 遠くの星が泣いている
 風に吹かれて ほぐは旅をする 忘れることも出来ず
 ごんな星の下 この時ばかりは 泣いたよ

ほぐがきみと別れた朝 遠くの星が泣いていた
 いつかまた出会うときが来ると 遠くの星が泣いていた
 いっだって どこでだって 探していたのに
 ごんな星の下 この時ばかりは 泣いたよ

いっだって どこでだって 探していたのに
 ごんな星の下 この時ばかりは 泣いたよ
 (鈴の音と石笛の響き)

どこへなりとも行かぬとも 声も聞こえぬふりを
 耳を澄まして天仰ぐ 両手を開いて今受ける
 あらゆるものが愛おしく すべてのことが懐かしく
 嗚呼 夢の跡 嗚呼 夢の城 水の感涙 愛しのふるさと

消えて終って無のしじま 終わりのしに声は無し
 騒がしきもの泣らぬ 声なき声に耳済ませ
 愛しきものを呼び覚まし すべてのいのち懐かしむ
 嗚呼 夢の跡 嗚呼 夢の城 水の感涙 愛しのふるさと

嗚呼 夢の跡 嗚呼 夢の城 水の感涙 愛しのふるさと
 水の感涙 愛しのふるさと (笛の響き)

110

終章 舟才天誦歌


オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ

天の川塵に流れ 地上に光の帯となって 緑の大地を育み
 世間に夢の帯となって 心の絆を結ぶ
 舟才天 輝け 舟才天 宇宙へ
 舟才天 響かせ 舟才天 天翔ける

オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ

天の星遠く流れ 地上に光の帯となって 魂の道を探らし
 世界に虹の帯となって 雲の境を超える
 舟才天 あはれ出せ 舟才天 宇宙へ
 舟才天 響かせ 舟才天 魂翔ける

オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンソラソライエイソワカ オンソラソライエイソワカ
 オンコロコセンドリマウギソワカ オンコロコセンドリマウギソワカ
 オーム (法螺貝奉奏)



111

釣石神社・鎮魂能舞「北上」




112

石巻市北上町釣石神社奉納鎮魂能舞「北上」2016年6月19日

第一楽章 北上 (ゆったりと 法螺貝 石笛 神鈴 奉奏)

神ながらたまちはへませ 神ながら 神ながらたまちはへませ 神ながら

(歌) 北上運けく 酒酒と流る
 海幸山幸 はじけるいのち
 友と語らい 明日を夢見
 今日喜びを 常永久に

(語り) 平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖から真っ黒な壁のような高浪が一帯に北上川に押し寄せ、みるみるうちに、家々を、田畑を、山野を呑み込んでいった。避難指示を待って校園に待機していた対岸の天川小学校の大勢の児童たちも呑み込まれていった。

赤い靴履いた女の子 異人さんに連れられていっちゃった
 横濱の港から 御舟に乗って 異人さんに連れられていっちゃった

逆らうことのできない自然の振る舞いではあり、まさに自然とは、そのような自然の律動に従って動き、はたらく、現象するものではあるとはいえず、人間世界の暮らしに多大な被害と悲惨と痛みをもたらすことも歴史の事実であった。

1150年前、貞観11年5月26日、三陸沖で大地震が起った。時の歴史書「日本三代実録」には、「流光真昼のように照らし、人々は叫び声を上げ倒れ伏して起き上がることができず、家の下敷きになって圧死する者、崩れた地面に埋もれる者続出。驚愕した牛馬走馬、城郭倉庫門壁、倒壊建築の数知れず。海、雷如く吠え、盛り上がった高波城下に押し寄せ、数十里を呑み込み、船に乗る間も山に溢れる間にも、ゆえ、溺死者千人を下らす。家財も稲苗も何も残らぬ大災害なり」と記されている。

その貞観大地震に比する大地震が平成23年3月11日午後2時46分起ったのだ。

113

嗚呼 無情なり 嗚呼 無常なり

神ながらたまちはへませ 神ながら 神ながらたまちはへませ 神ながら

この貞観大地震発生時の天皇は清和天皇、政務は、摂政太政大臣藤原良房が司っていた。本釣石神社の御祭神天児屋根命は、長く日本の政務を担当してきた熊野家の藤原氏・中臣氏の祖先神である。そして、天児屋根命の本地は地藏菩薩と信仰された。

神ながらたまちはへませ 助けたまえ 南無阿弥陀仏 救いたまえ

平成28年6月19日、東日本大震災から5年と3ヶ月、氏子崇敬者、また岐阜県南宮大社などの支援を受けて、石巻市北上町追浜に鎮座する釣石神社の新社殿が竣工なり、かかも盛大に奉行事が営まれることになった。

その復興・再建を祈り折伏、奉祝のみ祭に際し、ここに、京都市在住の観世流能楽師・河村博重と不肖・鎌田東二が共に心を込め、魂を込めて、「鎮魂能舞 北上」を奉納申しあげるものである。

北上運けく 酒酒と流る
 この麗しき 山河海
 心尽して みたまを悼み
 亡くしたいのちを 忘るまじ

第二楽章 夢にまで見た君ゆえに (静かに 横笛奉奏)

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
 祈り込めて届けたい 心尽きまで果たしたい
 仰ぎ見る空と

夢の果てまで君探し この世の果てまで君恋し
 届かぬ思いを見届けて いのち尽きでも届けなむ
 落ちて往く空へ

114

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなり
けり

この激しさの中に神が在る この慎みの中に
神が居る
神は海に住んでいるけれど 人の心の海にも
住んでいる

夢の奥まで迷い来ぬ 風に吹かれてさ迷いぬ
どこまで行けども果てしない 祈りの果てまで身を
投げ
て

開け天地 吹けよ山河
つなぐれ天地 結ばれよ山河

飛び惑う夢よ

この痛みの中に神が在る この静けさの中に
神が居る
神は天に住んでいるけれど 人の心の天にも
住んでいる

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
祈りを込めて届けたい 心尽きるまで果たしたい
仰ぎ見る空に

この喜びの中に神が在る この祭りの中に神
が居る
神は祭りの中に現われるけれど 祈る心の中
にも現われる

第三楽章 神（激しく 尺笛奏奏）

開け天地 吹けよ山河
つなぐれ天地 結ばれよ山河

この苦しみの中に神が在る この悲しみの中に神
が居る
神は森に住んでいるけれど 人の心の森にも住ん
でいる

115

第四楽章 弁才天讃歌

オンソラソパティエイソワカ(8回)

天の川清く流れ 地上に光の帯となって 緑の
大地を青み
世界に夢の帯となって 心の絆を結ぶ
弁才天 輝け 弁才天 世界へ 弁才天 響か
せ 弁才天 天翔ける

北上運けく 酒酒と流る
この麗しき 山河海
心尽して みたまを悼み
亡くしたいのちを 忘るまじ

オンソラソパティエイソワカ(8回)
天の星遠く流れ 地上に光の帯となって 魂の
道を照らし
世界に虹の橋となって 国の境を超える
弁才天 あふれ出せ 弁才天 宇宙へ 弁才天
響かせ 弁才天 魂翔ける

オンソラソパティエイソワカ(8回)
オーム

(ゆったりと 法螺貝奏奏)

神ながらたまちはへませ 神ながら 神ながら
まちはへませ 神ながら

(アカベラで ゆっくりしずかに)

116

銀河鉄道の夜

この地球から見ると銀河は白い乳の流れ
に見えて夜空を彩る

その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星
となる

その夜 ケントウスの祭りでぼくは不思議な夢を見た

銀河の夜汽車に乗って星の世界を旅する
夢だった

あゝの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しに行こう

カンパネラの上までぼくは旅をする
カンパネラの上からぼくは飛んでゆく

あゝの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しに行こう

あゝの空の果てまで ぼくたちみんな
まことのさいわいを探しに行こう 探してい
く 探していこう

この宇宙の中で地球はいのちと苦悩に満
ちた星として輝く

あゝの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しに行こう

カンパネラの上までぼくは旅をする
カンパネラの上から独りで飛んでゆく

あゝの空の果てまで ぼくたちみんな
まことのさいわいを探しに行こう 探してい
く 探していこう

117

防災拠点としての神社

◆日神天照大御神が天の岩屋戸に隠れて世界が暗黒に覆われた時、最大の危機を「祭り」を行なうことによって打開。

◆神話的思考が貞観大地震発生後にもはたらき、祇園祭の始まりとも関係する。

◆祭りもそれを行なう場所である神社などの祭場も、防災や浄化という観点から見てより強度のある場所として選定されている。

◆神社は、防災拠点、安全確保の場所。

◆宮城県仙台市若林区鎮座の「浪分神社」や石巻市北上町鎮座の釣石神社、気仙沼市の紫神社や岩手県九戸郡野田村の愛宕神社など。

◆『延喜式』神名帳に、延喜式内社2861所・3132座が記録。

◆東北地方では、陸奥国100座、出羽国9座。

◆陸奥国100座は、関東地方の常陸国26座、下総国11座、上総国5座、安房国6座、上野国12座、下野国11座、武蔵国44座、相模国13座などと比較して多い。

◆陸奥国は福島県、宮城県、岩手県、青森県の太平洋岸を含むといえ、出羽国9座という日本海側の式内社数に比して非常に多い。

118

祈りの実践としての「ケア」と「アート」

①アートエイド神戸（1995年～）→「神戸からの祈り」（1998年8月8日）<https://youtu.be/HUNHRC5MucU>

島田誠（1942 - 海天堂書店社長、海天堂ギャラリー代表） 十大重潤一郎（映画監督、1946 - 2015）

②アートエイド東北（2011年～）島田誠の提案をきっかけに結成

③臨床宗教師（2012年～、2016年2月「日本臨床宗教師会」設立、初代会長：島田進、二代会長：鎌田東二）

④「悲とアニメ展」（2015年3月開催：北野天満宮/The Terminal KYOTO等）～「悲とアニメⅡ～いのちの帰還展」（2021年11月開催、建仁寺塔頭・両足院/The Terminak KYOTO）
<https://youtu.be/WZV84PJLaaU>

119

<アートを通じた協働のいのり>
～阪神淡路大震災以後の活動事例をふまえて

○1、儀礼～宗教の三要素：神話・儀礼・聖地

○2、祈り～祈りは一人でも成り立つが、祭りは一人ではなく協働のいとなみである

○3、アート(芸術・芸能)～アートは儀礼としての側面を持ち、儀礼はアートとしての側面を持つ

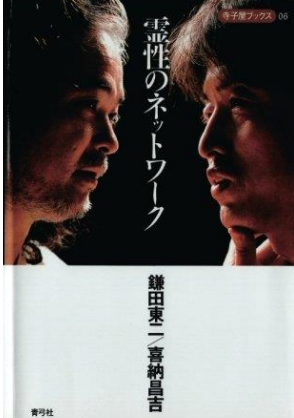
○「阪神淡路大震災」(1995年)以後の活動事例をふまえて

120

**「心のケア」と阪神淡路大震災と東日本大震災
と 芸術・芸能の活用**

- ① **阪神淡路大震災と「心のケア」**—臨床心理学(河合隼雄)、精神医学(中井久夫)
 - 事例1 島田誠「アートエイド神戸」の活動(1995年～)
 - 事例2 故大重潤一郎監督の映画「光りの島」(1995年)の制作
 - 事例3 「神戸からの祈り」の活動(1997年10月～1998年8月8日)
- ② **東日本大震災と「スピリチュアルケア、グリーフケア、宗教的ケア、臨床宗教師」**
 - 事例1 島田誠ほか「アートエイド東北」の活動(2011年～)
 - 事例2 東北被災地における神楽などの芸能による地域復興
 - 事例3 日本臨床宗教師会の設立(2016年2月)
 - 事例4 石巻市雄勝町葉山神社・北上町釣石神社での鎮魂能舞奉納(2015年9月20日、2016年6月19日)

121



**「神戸からの祈り」
(1998年8月8日)と
『霊性のネットワーク』**

- 鎌田東二・喜納昌吉
- 青弓社、1998年
- 「神戸からの祈り」(阪神淡路大震災の鎮魂のイベント、1998年8月25日、45分、サンテレビジョン)
- 「神戸からの祈り」you tube : <https://www.youtube.com/watch?v=QrVkm8DmK-I>

122